「詞花和歌集」の「詞書」の語彙について

若林俊英

一

本稿は、第六番めの勅撰和歌集である「詞花和歌集」の詞書・左注（以下、「詞花詞書」と略称する）の自立語語彙に関して、いささかまとめたものである。

語彙調査をするに当たっての単位語のとり方は、宮島達夫氏編『古典対照語い表』（昭和四六年九月、笠間書院。以下、『語い表』と略称する）における規定をおおむね使用させていただいた。[1] また、「詞花和歌集」の語数調査に関しては、西端幸雄氏編『詞花和歌集総索引』（平成元年二月、和泉書院）の学恩に浴した。[2] なお、以下、語彙数に関して、特に注記しない場合は、異なり語数である。

二―(1)

「詞花詞書」の自立語語彙の異なり語数・延べ語数は、それぞれ七三二語、二七三八語であり、平均使用度数は三・七四である。これらの数値を、三代集や「千載和歌集」「新古今和歌集」の詞書・左注（以下、それぞれ「三代集詞書」「千載詞書」「新古今詞書」と略称する）と比較してみると、[3] そのすべてが小さいものであることがわかる。例えば、平均使用度数でみると、「三代集詞書」は六・八八、「千載詞書」は五・五七、「新古今詞書」は五・五六である。これらから考えると、「詞花詞書」の語彙は、延べ語数の割に異なり語数は多いものの、全体的な語彙量も小さく、変化に乏しいもののようにもみえる。

ところで、表(1)は、筆者がかつて調査した勅撰和歌集の詞書・左注（以下、「詞書」と略称する）における異なり語数・延べ語数と、

表（1）

作品名	歌数(A)	異なり語数(B)	延べ語数(C)	B／A	C／A
古今詞書	1,140	892	3,973	0.78	2.76
後撰詞書	1,426	1,276	7,002	0.89	4.91
拾遺詞書	1,351	1,287	5,202	0.95	3.85
詞花詞書	420	732	2,738	1.74	6.52
千載詞書	1,285	1,257	6,999	0.98	5.45
新古今詞書	2,005	1,442	8,019	0.72	4.00

歌数の関係をまとめたものである。(4)

この表(1)でわかるように、「詞花和歌集」の歌数は、他の歌集に比すと非常に少なく、必然的に、異なり語数・延べ語数が少ないものの、歌数との関係からいうと、異なり語数も延べ語数も他の歌集におけるよりも相対的に多いことがわかる。この点を考慮すると、「詞花詞書」の語彙は、異なり語数・延べ語数の絶対数は少ないものの、質的な面では、決して他の「詞書」の語彙に劣るものではないとも言えそうである。

(2)

次に、「詞花詞書」の基幹語彙についてふれる。

ある作品において、どのような語をもってその作品の基幹語とするかについては、色々な考え方があろうが、ここでは、延べ語数の一パーミル以上の使用度数を持つ語をもって、仮に基幹語とする。

「詞花詞書」において一パーミル以上の度数を持つ語は、異なり語数で一九七語、延べ語数で二〇九〇語となる。この延べ語数二〇九〇語は、「詞花詞書」の延べ語数の七六・三三パーセントとなるが、この数値は、筆者がかつて調査した「後撰和歌集」や「拾遺和歌集」の「詞書」（以下、それぞれ「後撰詞書」「拾遺詞書」と略称する）での同様な値七一・二七パーセント、六七・一三パーセントとは多少差があるものの、西田直敏氏が示された「平家物語」の基幹語彙での同様な値七六・四パーセント(5)や、大野晋氏が示された「平安時代和文脈系文学の基本語彙」(6)（以下、「平安和文基本語彙」と略称する）での同様な値七九パーセント、かつて調査した「古今和歌集」の「詞書」（以下、「古今詞書」と略称する）での同様な値七六・一パーセントと比較的近いものである。このことからして、この一九七語を「詞花詞書」の基幹語彙とすることには、ある程度の妥当性があると考えられる。したがって、以下の考察における基幹語彙に関するものには、この一九七語を使用する。なお、資料として「詞花詞書」の基幹語彙を頻度順に示したので、参照願いたい。

三―(1)

次に、「詞花詞書」の基幹語彙を「平安和文基本語彙」と比較し、考察を加えることにする。

表（2）

段　階	共通語数	「平安和文基本語彙」での段階								非共通語
		1	2	3	4	5	6	7	8	
1	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0
2	3	1	1	1	0	0	0	0	0	2
3	6	1	1	0	1	1	1	0	1	1
4	11	1	0	0	1	6	2	1	0	1
5	15	1	3	2	3	2	1	2	1	5
6	25	1	0	3	5	6	3	5	2	4
7	49	0	5	3	4	6	8	13	10	16
8	33	1	1	1	3	7	6	6	8	25
計	143	6	11	10	17	29	21	27	22	54

表（2）は、西田直敏氏が「平家物語」の語彙の考察に関してなされたのとおおむね同様な方法により[7]「詞花詞書」の基幹語彙と「平安和文基本語彙」とをそれぞれ段階分けし、「詞花詞書」をもとにして、各所属語数をまとめたものである。

ところで、所属段階差がどの程度あれば特異な語であるとみなすかについては、議論の分かれるところであろうが、ここでは、その差が二段階以上あるものをもって特徴的な使用語とみなす。

(2)

表（2）でわかるように、特徴的な使用語は、①段階一語、③段階四語、④段階四語、⑤段階九語、⑥段階一一語、⑦段階一八語、⑧段階一九語の、計六六語である。

以下、具体的にそれらを示すと、

I　「詞花詞書」における所属段階の方が上位の語

「よむ（詠）」「いへ（家）」「まかる（罷）」「つき（月）」「うた（歌）」「さき（先・前）」「つかはす（遣）」「あそん（朝臣）」「くだる（下）」「くらゐ（位）」「あした（朝）」「かた（形）」

（以上、一二語）

II　「平安和文基本語彙」における所属段階の方が上位の語

「す（為）」「ひと（人）」「なし（無）」「こころ（心）」「もの（物・者）」「なる（成）」「はべり（侍）」「おはします（在）」「あり（有）」「うへ（上）」「その（其）」「ひとびと（人人）」「ひ（日）」「まへ（前）」「まうす（申）」「なか（中）」「み（身）」「おもふ

（思）」「きこゆ（聞）」「みや（宮）」「ほど（程）」「この（此）」「かた（方）」「いま（今）」「みゆ（見）」「つく（付・着、下二段）」「かの（彼）」「いづ（出）」「なく（泣・鳴）」「いかが（如何）」「たつ（立、四段）」「ちゆうぐう（中宮）」「こ（子）」「とふ（問）」「はかなし（果無）」「いと（甚）」「よ（世・代）」「え（副詞）」「おなじ（同）」「おほし（多）」「おぼゆ（覚）」「あき（秋）」「かはる（変・代）」「く（来）」「こゑ（声）」「とうぐう（春宮）」「とし（年）」「むすめ（娘）」「あめ（雨）」「とも（伴）」「ふね（船）」「みづ（水）」「ゆき（雪）」「わする（忘、下二段）」

（以上、五四語）

のようになる。

以下、I、IIの順で、具体的にみることにする。

(3)

「詞花詞書」における所属段階の方が上位の語については前掲したが、これらの語を「古今詞書」「後撰詞書」「拾遺詞書」「千載詞書」「新古今詞書」の基幹語彙における同様な語群と比較すると、「まかる」「つかはす」の二語がすべての「詞書」と、「よむ」「うた」の二語が「後撰詞書」以外の「詞書」と、「いへ」「あそん」の二語が「千載詞書」以外の「詞書」と、「あした」が「後撰詞書」「拾遺詞書」「新古今詞書」と、「くだる」「かた」の二語が「拾遺詞書」と、それぞれ共通していることがわかる。

ところで、前掲の各「詞書」とは共通しないものには「つき」「さき」「くらゐ」の三語があるが、そのうち「つき」と「さき」について、その使用実態をいささかみることにする。

八代集の四季の部に詠まれた「月」について浅見徹氏は、

三代集のころまでは、「月」を季節感をもって眺めることは少なかった。しかしその後季節との結び付きが急速に深まる。それは主として秋の景物としての月であるが、同時に他の季節においてもそれぞれの「月」を愛でるようになる[8]

と述べておられるが、以下、これを手がかりとして「つき」について考える。

「古今詞書」「後撰詞書」「拾遺詞書」「詞花詞書」「千載詞書」「新古今詞書」における「つき」の使用度数と使用率を示すと、表(3)のようになる。この表(3)から、三代集と比較して、「詞花詞書」において「つき」が頻用されていることがわかる。

表（3）

	延べ語数	使用率(‰)
古今詞書	10	2.517
後撰詞書	13	1.857
拾遺詞書	24	4.614
詞花詞書	32	11.687
千載詞書	74	10.573
新古今詞書	71	8.854

ところで、「詞花和歌集」の撰歌対象は、通説では「後撰和歌集」以降であると解されている。この点を考慮して、「詞書」に「つき」の語が使用された二九首（うち三首は重複）の作者を勅撰集での初

表（4）

	延べ語数	使用率(‰)
古今詞書	3	0.755
後撰詞書	5	0.714
拾遺詞書	2	0.384
詞花詞書	19	6.939
千載詞書	32	4.572
新古今詞書	40	4.988

出をもとに分類すると、「後撰和歌集」一名（一首）、「拾遺和歌集」九名（一〇首）、「後拾遺和歌集」八名（一〇首）、「金葉和歌集」四名（四首）、「詞花和歌集」三名（四首）となる。これからすると、「つき」の語が使用された「詞書」を持つ和歌の作者は、「拾遺和歌集」以降の人物であると、おおむね言えそうである。

以上のような点からみると、浅見氏の言われるような「歌」における題材の変化が「詞書」にも反映され、「詞花詞書」での「つき」の語の頻用となったと考えてよさそうである。

次に、「さき」についてふれることにする。

表(4)は、「古今詞書」「後撰詞書」「拾遺詞書」「詞花詞書」「千載詞書」「新古今詞書」に使用された「さき」の使用度数と使用率をまとめたものである。これによると「さき」は、いわゆる「三代集」の「詞書」において少なく、「詞花詞書」以下の「詞書」で多いことがわかる。特に、「詞花詞書」において使用率が相当高いが、その理由と思われることについて、以下、いささか述べる。

前記の点を考えるに当たり、「さき」の語が使用された「詞書」を持つ和歌の作者と、その時代との関係をみることにする。

作者に関して、当代の歌人であるかどうかの目安を、便宜的に「没年が前勅撰集宣下の年以降であること」[9]とすれば、「詞花詞書」に使用された一九例の「さき」のうち、

高内侍、正言、具平親王、道済、能因（二例）、頼宗（二例）、資業、頼綱、匡房（二例）、康資王母

の一〇名（一三例）は、ほぼ当代ではないと考えられる。同様に、「千載詞書」における三二例の「さき」の用例中二〇例（一二名）は、「新古今詞書」における四〇例中一六例（一五名）は、それぞれ当代の作者のものではないことがほぼ確実なものであると考えられる。この「詞花詞書」における一三、「千載詞書」における二〇、「新古今詞書」における一六は、それぞれの延べ語数に対する比率でみると、〇・四七四八パーセント、〇・二八五八パーセント、〇・一九九五パーセントとなるが、これらの数値は、先に表(4)で示したものと同様、「詞花詞書」における「さき」の使用率を注目させるものとなっている。

以上のような点からすると、「詞花詞書」における「さき」の頻用は、撰者顕輔の撰集意識の反映とは考えられないであろうか。

以上、「詞花詞書」における所属段階の方が上位の語群をみてきたが、そのほとんどが他の「詞書」とも共通するものであり、「詞書」的性格の非常に強いものであることがわかった。また、共通しないも

のは、題材の変化や撰者の意識等、和歌史と密接に関係した、ある意味での時代語的要素を持ったものであろうこともわかった。

(4)

次に、「平安和文基本語彙」における所属段階の方が上位の語群についてふれる。

上記に属する語は、前述のように五四語であるが、これらをかつて調査した「詞書」の基幹語彙における同様な語群と比較すると、「古今詞書」とは二九語、「後撰詞書」とは二七語、「拾遺詞書」とは二〇語、「千載詞書」とは二三語、「新古今詞書」とは二四語、それぞれ共通していることがわかった。また、五作品と共通しているものは「なし」「もの」「なる」「まへ」「あり」「おもふ」「おなじ」の七語、四作品と共通しているものは「す」「うへ」「その」「ひとびと」「みや」「ほど」「この」「みゆ」の八語、三作品と共通しているものは「ひと」「はべり」「おはします」「まうす」「み」「つく」「かた」「かの」「なく」「え」の一〇語であり、他の「詞書」と共通しないものは、わずか一二語に過ぎない。

この「平安和文基本語彙」における所属段階の方が上位のものには、「なし」「もの」「あり」「その」「ひとびと」「この」「ひと」「かの」等、簡潔性と具体性の重視という、一見矛盾した「詞書」の文章には比較的使用されにくい語が、当然のことではあるが、多数所属していることがわかる。

ところで、この語群では「こころ」という語にも注目しなければならないであろう。なぜなら、「千載詞書」において頻用された「…こころを詠める」という形式が、前後の歌集の「詞書」に比して非常に少ないからである。[10] これはいかなることを示しているのであろうか。

井上宗雄氏は、

金葉集は、単純な題が「心をよめる」で、複雑な題が「ことをよめる」で、これが「法則」のようなものであったらしい

とし、

詞花集は金葉集の書き方を襲っているが、数は減少している。千載集は複雑な題も単純な題もすべて「心をよめる」に統一されている

と言われている。[11]

確かに、「詞花詞書」における「こころ」の用例一二例中一一例が「…こころを詠める」か、それに類した表現中で、五六例の「こと」の用例中三六例が「…ことを詠める」か、それに類した表現中で、それぞれ使用されている。このことから、「こころ」や「こと」が題詠に関係していることは理解できるが、「こころ」の度数が少ない理由は、依然として理解できない。ただ、「金葉和歌集」の「こころを詠める」歌一三二首、「ことを詠める」歌一三七首[12]との比較から考えた場合、「詞花詞書」で「こころ」の度数が少ないのは、井上氏の言われる「複雑な題」が「単純な題」に比して相対的に多いという、題詠そのものの質的な変化の反映と、単純に考えるべきかもしれない。

(5)

次に、「平安和文基本語彙」とは共通しない語についてふれる。ここに属するのは、表(2)で示したように五四語であるが、それらは、

Ⅰ　和歌関係

「だい（題）」「うたあはせ（歌合）」「いひつかはす（言遣）」「ひやくしゅ（百首）」「かきつく（書付）」

Ⅱ　時・時間

「にねん（二年）」「くわんな（寛和、年号）」「よねん（四年）」「じようりやく（承暦、年号）」「てんとく（天徳、年号）」「ふゆごろ（冬頃）」「よもすがら（終夜）」

Ⅲ　人物

「だいじやうだいじん（太政大臣）」「しんゐん（新院）」「ほりかはゐん（堀河院）」「だいぶ（大夫）」「あきすけ（顕輔）」「ふぢはら（藤原）」「いへなり（家成）」「うだいじん（右大臣）」「たちばな（橘）」「としつな（俊綱）」「おほえ（大江）」「あきすゑ（顕季）」「いつき（斎院）」「しゆり（修理）」「しらかはゐん（白河院）」「たいくわうたいこうぐう（太皇太后宮）」「れいぜいゐん（冷泉院）」

Ⅳ　場・場面

「だいり（内裏）」「さきやう（左京）」「つ（津）」「みちのくに（陸奥国）」「かも（賀茂）」「きやうごく（京極）」「さんざう（山庄）」「あふみ（近江）」「さんでう（三条）」「しらかは（白川）」「ださい（太宰）」「はなみ（花見）」「はりま（播磨）」「ふしみ（伏見）」

Ⅴ　題材

「みづべ（水辺）」「おちば（落葉）」

Ⅵ　その他

「まうでく（詣来）」「までく（詣来）」「いであふ（出会）」「おほせ（仰）」「こふ（乞）」「たのむ（頼）」「にん（任）」「わする（忘、四段）」「やまひ（病）」

のように、便宜的にではあるが、分類できる。

右の分類でわかるように、ここに属するのは、時・所・人という、「詞書」にとって最も基本的な要素に関する語が中心であり、この点で「平安和文基本語彙」と共通しないのも然るべきであるものが多いことは言うまでもない。ただ、かつて調査した五作品の「詞書」と比較した場合、Ⅰの「だい」「うたあはせ」「かきつく」や、Ⅲの「うだいじん」、Ⅳの「みちのくに」のように、他の多くの「詞書」の語彙における同様な語群とも共通するものが属しているのと同時に、その多くは、一、二の「詞書」と共通するに過ぎないことにも注意を払う必要があろう。これらから考えると、この語群には、「詞書」の基層語的なものと、各「詞書」の時代を反映した、ある種の時代語的なものとが混在していると言えそうである。

表（5）

段階	所属語数	語種別語数			品詞別語数								
		和語	漢語	混種	名詞	動詞	形容	形動	副詞	連体	接続	感動	句等
1	1	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
2	5	4	1	0	3	2	0	0	0	0	0	0	0
3	7	7	0	0	3	4	0	0	0	0	0	0	0
4	12	11	1	0	10	2	0	0	0	0	0	0	0
5	20	15	4	1	13	6	1	0	0	0	0	0	0
6	29	24	5	0	20	7	1	0	0	1	0	0	0
7	65	54	8	3	35	23	4	0	1	2	0	0	0
8	58	46	11	1	42	10	2	0	4	0	0	0	0
9	113	87	26	0	79	25	3	1	5	0	0	0	0
10	422	326	84	12	282	104	17	10	4	1	0	0	4
合計	732	575	140	17	487	184	28	11	14	4	0	0	4
	%	78.6	19.1	2.3	66.5	25.1	3.8	1.5	1.9	0.6	0.0	0.0	0.6

四―(1)

次に、「詞花詞書」の語彙の品詞別、語種別特色についてふれることにする。

表(5)は、三―(1)で行ったのと同様な段階分けを「詞花詞書」の全語彙について行い、各段階ごとに語種別、品詞別の所属語数をまとめたものである。

以下、語種別、品詞別の順に、その使用実態をみることにする。

(2)

まず、語種別の使用実態についてふれる。

「詞花詞書」における全段階を通しての語種別使用比率は、表(5)に示したように、和語七八・六パーセント、漢語一九・一パーセント、混種語二・三パーセントとなっている。これらの数値は、かつて調査した同様な数値と比較した場合、和語においては「古今詞書」「後撰詞書」と「千載詞書」「新古今詞書」との中間に位置することがわかる。また、漢語においても、前記のような位置関係にある。[13] この点からみると、おおむね時代が新しくなるにつれて和語の比率が低くなり、漢語の比率が高くなるという、「詞書」の語種別使用比率の変化の枠内にあると言える。すなわち、「詞花和歌集」の撰集態度にもかかわらず、その「詞書」は、時代の反映が色濃くうかがえるものとなっている。

次に、品詞別の使用実態についてみることにする。

「詞花詞書」の語彙における名詞の使用比率は、表(5)でわかるよ

うに六六・五パーセントであるが、この数値を『語い表』所載の一四作品と比べると、「大鏡」の六三・九パーセントに比較的近いものの、どの作品の比率よりも高いことがわかる。また、かつて調査した五作品の「詞書」の語彙における比率と比較すると、「後撰詞書」の五九・四パーセントに次いで低いものであることがわかった。

次に、動詞の使用比率であるが、これも『語い表』所載の諸作品と比較すると、名詞の場合と同様に「大鏡」に近似した値となるものの、やはりどの作品よりも低いものとなっている。また、他の「詞書」の語彙における比率と比較すると、「後撰詞書」の三一・〇パーセントに次いで高いものとなっている。

「詞書」の語彙における延べ語数での名詞と動詞との比率をみた場合、名詞においては「後撰詞書」が五四・〇パーセントと一番低く、次いで、「詞花詞書」（五七・九パーセント）、「古今詞書」（六〇・一パーセント）の順となる。また、動詞においては「後撰詞書」が三八・〇パーセントと一番高く、以下、「詞花詞書」（三七・一パーセント）、「古今詞書」（三四・三パーセント）と続く。

形容語（形容詞・形容動詞・副詞・連体詞）における比率をみると、異なり語数では九・二パーセントの「後撰詞書」が一番高く、次いで、「詞花詞書」（七・八パーセント）、「古今詞書」（六・六パーセント）の順となる。また、延べ語数での比率をみても「後撰詞書」が七・九パーセントと一番高く、「古今詞書」（五・四パーセント）、「詞花詞書」（四・八パーセント）の順となる。

以上、「詞花詞書」の語彙における品詞構成比は、「千載詞書」や「新古今詞書」のそれよりも相対的に「後撰詞書」のそれに近似したものであることがわかった。また、「後撰詞書」の語彙における品詞構成比が相対的に和文脈系作品の品詞構成比に近いものである点からすれば、「詞花詞書」の語彙は、品詞構成比からみる限り、いわゆる「詞書」らしい「詞書」ではなく、散文的要素を比較的多く含んだ、「詞書」性の低いものであると言えそうである。

五―(1)

次に、「詞花詞書」の語彙と、「三代集詞書」「千載詞書」「新古今詞書」「伊勢物語」「源氏物語」「紫式部日記」「更級日記」「大鏡」「方丈記」「徒然草」の各語彙との共通度をみることにより、「詞花詞書」の性格の一端をみたいと思う。

表(6)は、「詞花詞書」の語彙を中心にし、各作品の語彙との共通語数・非共通語数を段階別に示したものである。なお、「伊勢物語」以下の七作品における各語の有無については、『語い表』によった。

以下、表(6)からわかる点を記す。

段階別共通語数については、④段階あたりまで「方丈記」を除きあまり差はないが、⑤段階を過ぎるあたりから「詞書」関係や、語彙量の大きい「源氏物語」「大鏡」「徒然草」とその他の作品との差が大きくなる。全段階を通しての共通語数では、語彙量の最も大きい「源氏物語」とのそれが最も多い。次いで、「三代集詞書」「大鏡」「新古今詞書」「千載詞書」「徒然草」の順となるが、「大鏡」や「徒然草」は

表（6）

段階	所属語数	三代集詞書 共通	三代集詞書 非共通	千載詞書 共通	千載詞書 非共通	新古今詞書 共通	新古今詞書 非共通	伊勢物語 共通	伊勢物語 非共通	源氏物語 共通	源氏物語 非共通
1	1	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0
2	5	5	0	5	0	5	0	4	1	4	1
3	7	7	0	7	0	7	0	6	1	7	0
4	12	12	0	12	0	12	0	11	1	12	0
5	20	17	3	19	1	18	2	12	8	16	4
6	29	26	3	25	4	27	2	22	7	26	3
7	65	60	5	57	8	58	7	41	24	57	8
8	58	49	9	46	12	45	13	34	24	48	10
9	113	87	26	76	37	82	31	63	50	90	23
10	422	219	203	172	250	192	230	143	279	274	148
計	732	483	249	420	312	447	285	337	395	535	197
共通度		0.186		0.268		0.259		0.161		0.046	

段階	所属語数	紫式部日記 共通	紫式部日記 非共通	更級日記 共通	更級日記 非共通	大鏡 共通	大鏡 非共通	方丈記 共通	方丈記 非共通	徒然草 共通	徒然草 非共通
1	1	1	0	1	0	1	0	0	1	1	0
2	5	4	1	3	2	4	1	3	2	3	2
3	7	4	3	6	1	6	1	5	2	6	1
4	12	11	1	10	2	12	0	7	5	12	0
5	20	14	6	14	6	18	2	14	6	19	1
6	29	25	4	22	7	27	2	16	13	23	6
7	65	44	21	44	21	52	13	29	36	47	18
8	58	33	25	34	24	42	16	22	36	36	22
9	113	58	55	63	50	84	29	31	82	74	39
10	422	148	274	148	274	216	206	75	347	190	232
計	732	342	390	345	387	462	270	202	530	411	321
共通度		0.120		0.114		0.077		0.120		0.090	

語彙量が比較的大きい作品であることや、他は「詞書」であることからすれば、この結果は十分予想されるものである。

共通度については、「千載詞書」の語彙とのそれが最も高く、以下、「新古今詞書」「三代集詞書」「伊勢物語」の順となる。この順序についても、上位三作品が「詞書」である点や、「伊勢物語」の文章と「詞書」のそれとの類似性から考えれば、当然の帰結であると言えるであろう。

ところで、ここに示した共通度は、「源氏物語」の語彙と「詞花詞書」の語彙との共通語数が最も多いにもかかわらず、その共通度が最も低いということでもわかるように、比較する二作品間の語彙量に

よって大きく左右されるという問題点を持っている。したがって、対象とする作品間の共通性については、語彙量を考慮した上で、大きな傾向はとらえ得るが、本稿における「詞花詞書」と「千載詞書」「新古今詞書」との場合などは、その差が必ずしも明確なものとはなり得ない。このような点を考慮し、次に、水谷静夫氏が示された類似度D′の計算式[16]を使用し、「詞花詞書」の語彙についてみることにする。

(2)

表(7)は、「詞花詞書」の語彙と「古今詞書」「後撰詞書」「拾遺詞書」の語彙との類似度D′の値を示したものである。これでみると、「詞花詞書」は「後撰詞書」との類似度が相対的に高いことがわかる。これは、四―(2)で述べた「詞花詞書」の語彙と「後撰詞書」の語彙との相対的な類似性の高さを、類似度の点から裏付けるものとなっている。

表（7）

	類似度 D′
古今詞書	0.7249
後撰詞書	0.7650
拾遺詞書	0.7581

次に、「三代集詞書」の語彙と「詞花詞書」「千載詞書」「新古今詞書」の語彙との類似度を計算したところ、それぞれ〇・七九三九、〇・七九五四、〇・八一七四のようになった。いずれも非常に高い値を示しているが、特に、「三代集詞書」と「新古今詞書」との類似度の高さは、他の二者と明確に区別できるものとなっている。ここでの数値は、かつて調査した順位相関係数の面からみた「新古今詞書」の語彙と「三代集詞書」の語彙との相関の強さを類似度D′から裏付けている。[17]

ところで、「三代集詞書」と「詞花詞書」「千載詞書」との類似度D′では、わずかではあるが、「三代集詞書」と「千載詞書」でものの方が高い点、前述の通りである。この差はいかなる所から生じたものなのであろうか。

表（8）

	類似度 D′
古今詞書	0.7400
後撰詞書	0.7674
拾遺詞書	0.7506

表(8)は、「千載詞書」の語彙と「古今詞書」「後撰詞書」「拾遺詞書」の語彙との類似度D′の値を示したものである。この表(8)と、前掲表(7)からみると、「古今詞書」と「詞花詞書」「千載詞書」との類似度の差が、「三代集詞書」と「詞花詞書」「千載詞書」との類似度の差に大きく関係していることがわかる。

三代集と「詞花和歌集」や「千載和歌集」については、

そののち後拾遺はよき歌あまりこぼれて候ける世なれば、撰たてられたるやうげすしく候、金葉集、詞花、きやうきやうなるやうに候、千載おちしづまり、まことに勅撰がらはめでたく候[18]

という二条家流の和歌史の考え方があるが、「詞書」の語彙についても、類似度D′の点からみる限り、「千載詞書」の語彙は、「詞花詞書」の語彙を飛び越え、「三代集詞書」の語彙、特に「古今詞書」の語彙と関係していると言えそうである。

六

次に、順位相関係数の点からみた「詞花詞書」の語彙と他の「詞書」の語彙との関係についてふれる。

ここで対象とするのは、「詞花詞書」「千載詞書」「新古今詞書」「三代集詞書」の各「詞書」の基幹語彙のうち共通する以下の六七語である。

「よむ（詠）」「いふ（言）」「しる（知・領）」「だい（題）」「こと（事）」「うたあわせ（歌合）」「す（為）」「とき（時）」「いへ（家）」「まかる（罷）」「つき（月）」「みる（見）」「うた（歌）」「もと（元・本・下）」「ひと（人）」「をんな（女）」「かみ（上・守）」「ころ（頃）」「はな（花）」「つかはす（遣）」「たてまつる（奉、四段）」「あそん（朝臣）」「かへる（帰）」「くに（国）」「ところ（所）」「のち（後）」「きく（聞）」「なし（無）」「はべり（侍）」「こころ（心）」「もの（物・者）」「よ（夜）」「なる（成）」「かく（書）」「ひ（日）」「まへ（前）」「あした（朝）」「あふ（合・逢）」「あり（有）」「うへ（上）」「かへし（返）」「はる（春）」「かへりごと（返言）」「その（其）」「まうす（申）」「やま（山）」「しのぶ（偲・忍、四段）」「なか（中・仲）」「ひとびと（人人）」「み（身）」「をのこ（男）」「おもふ（思）」「さくら（桜）」「ひさし（久）」「うだいじん（右大臣）」「かきつく（書付）」「ほととぎす（時鳥）」「ほど（程）」「めす（召）」「もみぢ（紅葉）」「とほし（遠）」「まうづ（詣）」「みゆ（見）」「あき（秋）」「おなじ（同）」「とし（年）」「ゆき（雪）」

以上の六七語に関して、スピアマンの計算式[19]を用いて順位相関係数を計算したところ、

「詞花詞書」と「千載詞書」が〇・六三六、「詞花詞書」と「新古今詞書」が〇・七一六、「千載詞書」と「新古今詞書」が〇・八〇〇となることがわかった。また、「三代集詞書」と「詞花詞書」「千載詞書」「新古今詞書」との相関係数は、それぞれ〇・七五七、〇・六三五、〇・七〇四であることもわかった。

以上、順位相関係数でみる限り、「詞花詞書」の語彙は各「詞書」の語彙と、それぞれ強い相関関係にあり、そのことからすると、当然のことではあるが、各「詞書」の語彙には高い類似性があると言える。

ところで、五―(2)の類似度D′でみた通り、「詞花詞書」の語彙は三代集の伝統から相対的に距離を置いたものとなっていた。ところが、順位相関係数によってみると、「詞花詞書」と「三代集詞書」との相関係数が「千載詞書」や「新古今詞書」と「三代集詞書」との相関係数よりも大きくなる。この係数の大きさは、既述した類似度D′での結果や共通度から考えると奇異に感じられるものであろう。しかし、

I　「詞花和歌集」の入集歌は、当代のものが少なく、「後撰和歌集」以降の、主として過去のものが中心である

II　「三代集詞書」の語彙の頻度順位は、「古今詞書」の語彙の度数よりも「後撰詞書」や「拾遺詞書」のそれらに、より大きく影響されている

Ⅲ　順位相関係数の計算の対象とする語彙が、「各『詞書』の基幹語彙のうち共通するもの」という、非常に限定されたものであるため、各「詞書」を特色づける語彙のうち、使用度数の小さいものはもれてしまう

等の点を考え合わせると、必ずしも矛盾したものとは言えないであろう。

例えば、Ⅱについてみると、順位相関係数の計算対象語彙六七語を「古今詞書」「後撰詞書」「拾遺詞書」の各「詞書」ごとに頻度順に並べ、「三代集詞書」の頻度順との差が一〇以上あるものを数えると、「古今詞書」においては三〇語、「後撰詞書」においては一六語、「拾遺詞書」においては二一語と、圧倒的に「古今詞書」の場合が多い。また、調査対象語彙に相違はあるものの、かつて調査した「古今詞書」「後撰詞書」「拾遺詞書」の語彙と「三代集詞書」の語彙との順位相関係数をみると、それぞれ〇・七七二、〇・八二四、〇・八四八であり、[20]「三代集詞書」の語彙の頻度順位が「後撰詞書」や「拾遺詞書」の語彙の頻度順位に大きく影響されていることがわかるであろう。

以上のような点から考えてみると、類似度Dでの結果と矛盾しているようにみえる順位相関係数での結果も、首肯できるものと言える。

七

以上、「詞花詞書」の自立語語彙についていささかみてきたが、ここでその要点を再掲することにより、まとめとしたい。

1　「詞花詞書」の自立語語彙における異なり語数は七三二語、延べ語数は二七三八語である。

2　延べ語数の一パーミル以上の度数を持つ語を基幹語とすると、「詞花詞書」のそれは、異なり語数で一九七語、延べ語数で二〇九〇語となる。また、この二〇九〇語は、全延べ語数の七六・三三パーセントに当たる。

3　「詞花詞書」の基幹語彙における所属段階の方が「平安和文基本語彙」におけるそれよりも上位の語は一二語あり、その多くは他の「詞書」での同様な語群と共通している。また、共通しない語のうち、「つき」は歌における題材の変化の「詞書」への反映によって、「さき」は撰者顕輔の撰集意識の反映によって、それぞれ頻用された、ある意味での時代語的要素を持ったものと考えられる。

4　「平安和文基本語彙」における所属段階の方が「詞花詞書」の基幹語彙におけるそれよりも上位の語群には、当然のことながら、簡潔性・具体性という点からして劣ると考えられるものが多数属している。また、ここに属する「こころ」の度数の少なさは、「複雑な題」が「単純な題」に比して多いという、「詞花和歌集」における題詠そのものの質的な変化の反映と考えられる。

5　「詞花詞書」の基幹語彙のうち、「平安和文基本語彙」と共通しない語群には、「詞書」の基層語的なものと、各「詞書」の時代を反映した、ある種の時代語的なものが混在している。

6　「詞花詞書」の語彙における品詞構成比率は、「千載詞書」や

「新古今詞書」の語彙におけるそれよりも、相対的に「後撰詞書」の語彙におけるそれに近似している。この点からすると、「詞花詞書」の語彙は、散文的要素を比較的多く持った、「詞書」性の低いものであると考えられる。

7　「詞花詞書」の語彙と他作品の語彙との共通語数では、語彙量の最も大きい「源氏物語」とのそれが最も多く、次いで、「三代集詞書」「大鏡」「新古今詞書」「千載詞書」の順となる。

8　「詞花詞書」の語彙と「古今詞書」「後撰詞書」「拾遺詞書」の語彙との類似度D′をみると、「後撰詞書」の語彙とのそれが相対的に高い。

9　類似度D′でみると、「千載詞書」の語彙は、「詞花詞書」の語彙を飛び越え、「三代集詞書」の語彙と類似していると言えるが、この「三代集詞書」と「千載詞書」との類似度の高さには、「古今詞書」と「千載詞書」との類似度が大きく寄与している。

10　順位相関係数をみると、「詞花詞書」の語彙は、他の「詞書」の語彙と、それぞれ強い相関関係にあることがわかる。

（注）

（1）以下、用例や統計に関して『語い表』とした場合は、宮島達夫・中野洋・鈴木泰・石井久雄氏編『フロッピー版古典対照語い表および使用法』（平成元年九月、笠間書院）による。

（2）ただし、私意により読みを改めた箇所がある。

（3）拙稿a「三代集の『詞書』の語彙について」（『城西文学』一三号、平成二年一二月）、b「『千載和歌集』の『詞書』の語彙について」（『城西大学女子短期大学部紀要』九巻一号、平成四年一月）、c「『新古今和歌集』の『詞書』の語彙について」（『湘南文学』一九号、昭和六〇年三月）。以下、「三代集詞書」「千載詞書」「新古今詞書」に関しては、それぞれ前掲のものによる。なお、語数・比率等に関しては、調査対象範囲および読み方変更による再調査の結果、その数値に異動がある。

（4）拙稿d「『古今和歌集』詞書の語彙について」（『湘南文学』一七号、昭和五八年三月）、e「『後撰和歌集』の『詞書』の語彙について」（『此島正年博士喜寿記念国語語彙語法論叢』昭和六三年一〇月、桜楓社）、f「『拾遺和歌集』の『詞書』の語彙について」（『城西大学女子短期大学部紀要』八巻一号、平成三年一月）。以下、「古今和歌集」「後撰和歌集」「拾遺和歌集」の「詞書」に関しては、それぞれ前掲のものによる。なお、語数・比率等に関しては、調査対象範囲および読み方変更による再調査の結果、その数値に異動がある。

歌数に関しては、異本歌を含めた各索引（後記）の本文（篇）における数をとったので、各索引の底本そのものの歌数とは一致していないものもある。

使用した索引は、西下経一・滝沢貞夫氏編『古今集総索引』（昭和三三年九月、明治書院）、大阪女子大学国文学研究室編『後撰和歌集総索引』（昭和四〇年一二月、大阪女子大学）、片桐洋一氏編『拾遺和歌集の研究　索引篇』（昭和五一年九月、大学堂書店）、滝沢貞夫氏編『千載集総索引』（昭和五一年七月、笠間書院）、滝沢貞夫氏編『新古今集総索引』（昭和四五年八月、明治書院）。なお、「詞花和歌集」に関しては、既述、西端氏の編書によった。

（5）『平家物語の文体論的研究』（昭和五三年一一月、明治書院）第二章第一節「語彙研究の方法」。

（6）「平安時代和文脈系文学の基本語彙に関する二三の問題」（『国語学』八七集、昭和四六年一二月）。

(7)　(5)書。
(8)　「八代集における季節」(『国語語彙史の研究　七』昭和六一年一二月、和泉書院)。
(9)　実際の詠歌時期および活躍時期との関係で問題はあろうが、一応の目安にはなると考えられる。
(10)　「金葉和歌集」の「詞書」は未調査なので使用率等は不明であるが、増田繁夫・居安稔恵・柴崎陽子・寺内純子氏編『金葉和歌集総索引　本文・索引』(昭和五一年一二月、清文堂)によると、「こころ」が一五五例あり、歌数との関係から考えても「詞花詞書」より非常に多いと思われる。
(11)　「再び『心を詠める』について」(『立教大学日本文学』三九号、昭和五二年一二月)。
(12)　(11)論文。
(13)　「古今詞書」「後撰詞書」「千載詞書」「新古今詞書」の各語彙における異なり語数での和語の比率は、それぞれ八九・〇パーセント、八七・九パーセント、六八・〇パーセント、七〇・七パーセント。また、漢語の比率は、それぞれ一〇・〇パーセント、一〇・八パーセント、二九・二パーセント、二六・六パーセントである。
(14)　(4)拙稿e。
(15)　水谷静夫氏「語彙の共通度について」(『計量国語学』七号、昭和三三年一二月)。
(16)　「用語類似度による歌謡曲仕訳『湯の町エレジー』『上海帰りのリル』及びその周辺」(『計量国語学』一二巻四号、昭和五五年三月)、『数理言語学』(昭和五七年一月、培風館)第三章「用語の類似度」、『語彙』(朝倉日本語新講座2、昭和五八年四月、朝倉書店)第五章第四節「数量化Ⅳ類による作品解析」他。
(17)　(3)拙稿b。
(18)　「越部禅尼消息」。引用は『群書類従　九輯　文筆部・消息部』(昭和五二年八月、続群書類従完成会、訂正三版第三刷)による。
(19)　田中章夫氏「語彙研究における順位の扱い」(『国語語彙史の研究七』昭和六一年一二月、和泉書院)に示されているものによった。
(20)　(3)拙稿a。本稿で計算の対象とした六七語中一八語を抜き、新たに二七語を加えた、計七六語で計算した数値である。

平成四年九月三〇日

順位	単語		度数
一	よむ	詠	二六五
二	いふ	言	七〇
三	しる	知	六二
四	だい	題	六二
五	こと	事	五六
六	うたあわせ	歌合	四七
七	す	為	四六
八	とき	時	四四
九	いひつかはす	言遣	四三
一〇	いへ	家	四一
一一	まかる	罷	三四
一二	つき	月	三二
一三	みる	見	二九
一四	うた	歌	二八
一五	もと	元本下	二八
一六	ひと	人	二六
一七	をんな	女	二六
一八	をとこ	男	二三
一九	かみ	上守	二二
二〇	ころ	頃	二二
二一	はな	花	二一
二二	さき	前先	一九
二三	つかはす	遣	一九
二四	たてまつる	奉	一八
二五	だいじやう	太政	

順位	単語		度数
二六	あそん	朝臣	一六
二七	かへる	帰	一五
二八	くだる	下	一五
二九	くに	国	一五
三〇	しんゐん	新院	一五
三一	ところ	所	一五
三二	のち	後	一五
三三	ひやくしゆ	百首	一五
三四	きく	聞	一四
三五	なし	無	一四
三六	はべり	侍	一四
三七	ほりかはゐん	堀河院	一三
三八	おはします	在	一二
三九	こころ	心	一二
四〇	だいり	内裏	一二
四一	もの	物者	一二
四二	よ	夜	一二
四三	くらゐ	位	一一
四四	だいぶ	大夫	一一
四五	なる	成	一一
四六	あかし	明	一〇
四七	かく	書	一〇
四八	ひ	日	一〇
四九	まへ	前	一〇

順位	単語		度数
五〇	あした	朝	九
五一	あふ	合逢	九
五二	あり	有	九
五三	うへ	上	九
五四	かへし	返	九
五五	くわんぱく	関白	九
五六	にようばう	女房	九
五七	はる	春	九
五八	あきすけ	人名	八
五九	かへりごと	返事	八
六〇	さきやう	地名	八
六一	その	其	八
六二	にねん	二年	八
六三	まうす	申	八
六四	やま	山	八
六五	かた	形	七
六六	しのぶ	偲忍	七
六七	たゆ	絶	七
六八	なか	中	七
六九	のぼる	上	七
七〇	ひとびと	人人	七
七一	びやうぶ	屏風	七
七二	ふぢはら	人名	七
七三	み	身	七
七四	をのこ	男	七

順位	単語		度数
七五	いへなり	人名	六
七六	おもふ	思	六
七七	きこゆ	聞	六
七八	くわんな	年号	六
七九	ぐす	具	六
八〇	さくら	桜	六
八一	さゑもん	左衛門	六
八二	だいなごん	大納言	六
八三	ちる	散	六
八四	つく	付	六
八五	ひさし	久	六
八六	みや	宮	六
八七	いかが	如何	五
八八	うだいじん	右大臣	五
八九	おくる	後遅	五
九〇	かきつく	書付	五
九一	かた	方	五
九二	かの	彼	五
九三	こひ	恋	五
九四	さくらばな	桜花	五
九五	たちばな	人名	五
九六	たつ	立四段	五
九七	ちゆうぐう	中宮	五
九八	つ	地名	五
九九	としつな	人名	五

順位	単語		度数
一〇〇	なぬか	七日	五
一〇一	はつ	果	五
一〇二	ほととぎす	時鳥	五
一〇三	ほど	程	五
一〇四	まうでく	詣来	五
一〇五	まつ	待	五
一〇六	みちのくに	地名	五
一〇七	めす	召	五
一〇八	もみぢ	紅葉	五
一〇九	よねん	四年	五
一一〇	わらは	童	五
一一一	いづ	出	四
一一二	いま	今	四
一一三	うぢ	地名	四
一一四	おちば	落葉	四
一一五	おと	音	四
一一六	おほえ	人名	四
一一七	おもし	重	四
一一八	おや	親	四
一一九	かも	地名	四
一二〇	きやうごく	地名	四
一二一	こ	子	四
一二二	この	此	四
一二三	こもる	籠	四
一二四	ごらんず	御覧	四
一二五	さく	咲	四

順位	単語		度数
一二六	さんざう	山庄	四
一二七	そち	帥	四
一二八	つごもり	晦日	四
一二九	とふ	問	四
一三〇	とほし	遠	四
一三一	なく	泣鳴	四
一三二	なげく	歎	四
一三三	はかなし	果無	四
一三四	はづき	八月	四
一三五	ふみつき	七月	四
一三六	まうづ	詣	四
一三七	までく	詣来	四
一三八	みゆ	見	四
一三九	をしむ	惜	四
一四〇	あかつき	暁	三
一四一	あき	秋	三
一四二	あきすゑ	人名	三
一四三	あふみ	地名	三
一四四	あめ	雨	三
一四五	あるじ	主	三
一四六	いちでう	地名	三
一四七	いつき	斎院	三
一四八	いであふ	出会	三
一四九	いと	甚	三
一五〇	え	副詞	三
一五一	おなじ	同	三

順位	単語		度数
一五二	おのおの	各	三
一五三	おほし	多	三
一五四	おほせ	仰	三
一五五	おぼゆ	覚	三
一五六	かくる	隠	三
一五七	かはる	変代	三
一五八	かよふ	通	三
一五九	きやう	京	三
一六〇	く	来	三
一六一	こふ	乞	三
一六二	こゑ	声	三
一六三	さつき	五月	三
一六四	さんでう	地名	三
一六五	しぐれ	時雨	三
一六六	しゆり	修理	三
一六七	しらかは	地名	三
一六八	しらかはゐん	白河院	三
一六九	じようりやく	年号	三
一七〇	すみよし	地名	三
一七一	たいくわう	太皇	
	たいこうぐう	太后宮	三
一七二	たのむ	頼	三
一七三	だざい	地名	三
一七四	てんとく	年号	三
一七五	とうぐう	春宮	三
一七六	とし	年	三

順位	単語		度数
一七七	とも	伴	三
一七八	ながつき	九月	三
一七九	には	庭	三
一八〇	にん	任	三
一八一	はなみ	花見	三
一八二	はりま	地名	三
一八三	ひま	隙	三
一八四	ふしみ	地名	三
一八五	ふね	船	三
一八六	ふゆごろ	冬頃	三
一八七	みづ	水	三
一八八	みづべ	水辺	三
一八九	みゆき	行幸	三
一九〇	むすめ	娘	三
一九一	やまひ	病	三
一九二	ゆき	雪	三
一九三	よ	世代	三
一九四	よもすがら	終夜	三
一九五	れいぜいゐん	冷泉院	三
一九六	わする	忘四段	三
一九七	わする	忘下二	三